

プニアとさめの王さまカイアレアレ (ハワイ)

むかし、ハワイ島に、さめの王さまカイアレアレが住んでいました。

カイアレアレのすみかは、えびがどっさりいる岩穴のそばでした。カイアレアレと十四の子分たちはいつも目を光らせていて、えびを取りに来た人間をつかまえては食べていました。

そのころ、島に、プニアという少年が、いました。お父さんはえびを取りにいったさめに食べられてしまい、お母さんとふたりだけで暮らしていました。お母さんは、毎日、ジャガイモを食べながらいました。

「ああ、このじゃがいもに、魚かえびをそえて食べられたら、ほんとうにいいんだけどねえ」

プニアは、なんとかしてえびを取りたいと思いました。

ある日、プニアは、えびのいる岩穴の上に出かけて行きました。海の中をのぞくと、カイアレアレと十四の子分が眠っているのが見えました。やがてさめたちが目を覚ますと、プニアは大きな声でいいました。

「あれえ。カイアレアレと子分たちは、みんな寝ているな。ようし、岩穴にもぐって行って、えびをつかまえて来よう」

それを聞いて、カイアレアレは、子分たちにいいました。

「プニアがもぐって来たら、飛びかかって行って、食べてやろうぜ」

プニアは、大きな石を持ち上げて、岩穴から少しはなれた海の中にドブンと放りこみしました。カイアレアレたちは、えびの穴はほったらかしにして、まっしぐらに石の落ちたほうへおよいで行きました。そのあいだに、プニアは水にもぐって岩穴からえびを二匹つかみ、いそいで岩の上にはい上がりました。それから、カイアレアレたちにむかってさけびました。

「おーい。みんなそこにいるかい。一番さめ、二番さめ、三番さめ、四番さめ、五番さめ、六番さめ、七番さめ、八番さめ、九番さめ、十番さめ。ところで、ぼくにえびのとり方を教えてくれたのは、しっぽの細い十番さめだよね」

カイアレアレはこれを聞くと、子分たちを一行に並ばせました。数えてみると、みんなで十四いて、十番目のは細いしっぽをしていました。そこで、

「おまえだな。プニアにえびのとり方を教えたのは。おまえは死刑だ」といって、みんなでしっぽの細い十番さめを食べてしまいました。プニアは、

「やあい。おまえたち、仲間をひとり食べちゃった」とはやしたてました。そして、えびを持ってお母さんのところに帰り、ジャガイモにそえて食べました。

えびをすっかり食べてしまうと、プニアは、また岩穴の上に出かけて行きました。そして、大きな声で、

「あれえ。カイアレアレと子分たちは、みんな寝ているな。ようし、もういちど岩穴にも

ぐって行って、えびをつかまえて来よう」といいました。

カイアレアレは、子分たちにいいました。

「プニアがもぐって来たら、飛びかかって行って、食べてやろうぜ」

プニアは、大きな石を海の中にドブンと放りこみました。そして、カイアレアレたちがそっちへおよいで行っているあいだに、水にもぐってえびをつかまえ、岩の上にはい上がりました。それから、カイアレアレたちにむかってさけびました。

「おーい。みんなそこにいるかい。一番ざめ、二番ざめ、三番ざめ、四番ざめ、五番ざめ、六番ざめ、七番ざめ、八番ざめ、九番ざめ。ところで、ぼくにえびのとり方を教えてくれたのは、おなかの太った九番ざめだよ」

カイアレアレは、子分たちを一列に並ばせました。数えてみると、みんなで九匹いて、九番目は太ったおなかをしていました。

「おまえだな。プニアにえびのとり方を教えたのは。おまえは死刑だ」

みんなは、おなかの太った九番ざめを食べてしまいました。プニアは、

「やあい。おまえたち、仲間をひとり食べちゃった」とはやしたて、えびを持ってお母さんのところに帰りました。

しばらくすると、プニアは、また岩穴の上に出かけて行って、大きな声でいいました。

「あれえ。カイアレアレと子分たちは、みんな寝ているな。ようし、もういちど岩穴にもぐって行って、えびをつかまえて来よう」

カイアレアレは、子分たちにいいました。

「プニアがもぐって来たら、こんどこそ食べてやろうぜ」

プニアは、大きな石を海の中にドブンと放りこみました。そして、カイアレアレたちがそっちへおよいで行っているあいだに、水にもぐってえびをつかまえ、岩の上にはい上がりました。それから、カイアレアレたちにむかってさけびました。

「おーい。みんなそこにいるかい。一番ざめ、二番ざめ、三番ざめ、四番ざめ、五番ざめ、六番ざめ、七番ざめ、八番ざめ。ところで、ぼくにえびのとり方を教えてくれたのは、小さな目の八番ざめだよ」

カイアレアレは、子分たちを一列に並ばせました。数えてみると、みんなで八匹いて、八番目は小さな目をしていました。

「おまえだな。おまえは死刑だ」

みんなは、小さな目の八番ざめを食べてしまいました。プニアは、  
「やあい。おまえたち、また仲間をひとり食べちゃった」とはやしたて、えびを持ってお母さんのところに帰りました。

こうして、プニアは、岩穴の上にをかけては、えびを取ってかえりました。さめは、いっぴきずつ食べられて、とうとう、カイアレアレだけになってしまいました。

ある日、プニアは、森で一メートルほどの長さの固い木を二本切って来て、火を起こす道具といっしょにふくろに入れました。そして、ふくろをもって岩穴の上に行き、大きな

声でいいました。

「ああ、えびが取りたいなあ。もしカイアレアレが、ぼくをガブリとやっても、水にうかんだぼくの血で、お母さんは、ぼくを生き返らせてくれるだろう。でも、もしカイアレアレが、ぼくを丸ごと飲みこんだら、ぼくはぜったい助からない」

カイアレアレはつぶやきました。

「ようし、あいつを一飲みにしてやろう」

そのとき、プニアは、ふくろをもって水に飛びこみました。カイアレアレは、口を大きく開けて、プニアを一飲みにしました。プニアは、おなかに入ったとたん、ふくろから二本の木を取り出して、カイアレアレののどにつっかいぼうをしました。カイアレアレは、口を閉じることができなくなってしまいました。

それから、プニアは、カイアレアレのおなかの中で火を起こして食べ物を煮始めました。カイアレアレは、苦しがつて、海じゅうをおよぎまわりました。プニアはいいました。

「こいつが、ごつごつした岩の岸に行ってくれば、ぼくは助かるんだけどなあ。草の生えている砂浜なんかに行けば、ぼくはぜったい助からない」

カイアレアレは、

「ようし、あいつを草の生えている砂浜に連れて行ってやろう」といって、草の生えている砂浜目がけて、つつこんでいきました。そして、砂の上に乗り上げて、もどれなくなっ  
てしまいました。

プニアは、カイアレアレの口から飛び出して、さけびました。

「おい、みんな、さめの王さまカイアレアレが、ぼくらの村をたずねて来たよ」

村の人たちは、飛び出して来て、にくいカイアレアレをやっつけてしまいました。

それから、プニアは、毎日、岩穴にもぐっては、お母さんのためにえびをとって来ました。村の人たちは、悪者のさめがいなくなつて、大喜びしましたとき。

おしまい

村上郁再話

資料『新編世界のむかし話集10 アメリカ・オセアニア』山室静編著／文元社